

P22

上顎犬歯に歯胚位置異常を認めた3例

○西俣はるか、齋藤 幹、釜崎陽子、佐藤恭子、増山千絵*、藤原 卓

(長大院・医歯薬・小児歯、*増山歯科医院)

【緒言】

小児は成長発育中の個体であり、歯の形成過程で何らかの障害が起こると様々な異常が口腔内に現れる。その異常をより早期に診断し、影響が少ない段階で問題に対応することは、小児歯科の大きな役割である。萌出方向の異常による埋伏や異所萌出は、上顎中切歯に次いで上顎犬歯に多い。今回我々は、上顎犬歯の埋伏を認めた患児3名（うち2名は双生児）に対し、開窓および牽引を行ったので報告する。

【症例】

3例とも主訴は 3の萌出遅延（埋伏）であった。

症例1：初診時10歳2か月 女児

現病歴：約7か月前、前医にて 3の歯胚位置異常に対して開窓処置を受けたが、その後歯科受診せず 3の萌出が無いまま開窓部が閉鎖した。

現症：初診時歯式

6E4321	12C4E6
6E4321	123DE6

齶蝕所見無く、上下の被蓋関係は正常であった。Cが残存し動揺も無い状態で、約7か月前の開窓部は不明であった。パノラマエックス線写真にて 3歯胚は 12根尖側付近に位置し、両根尖の外部吸収を認めた。CT画像にて 3歯胚が 1根尖の口蓋側にあることを確認した。

診断：3歯胚位置異常、12歯根外部吸収

症例2：初診時10歳2か月 女児（症例1の双子の姉妹）

現病歴：症例1と同様。

現症：初診時歯式

6E4321	12C4E6
6E4321	1234E6

齶蝕所見無く、上下の被蓋関係は正常であった。Cは残存し動揺も無い状態で、約7か月前の開窓部は不明であった。パノラマエックス線写真より 3歯胚の 1歯根への近接と、1根尖部の外部吸収を認めた。CT画像にて 3歯胚位置が 1根尖の唇側であることを確認した。

診断：3歯胚位置異常、1歯根外部吸収

症例3：初診時11歳0か月 女児

現病歴：かかりつけ歯科医院にて、3埋伏を指摘され、紹介にて当科受診。

現症：初診時歯式

6E4321	1BC4E6
6E4321	1234E6

齶蝕所見無く、上下の被蓋関係は正常であった。1には軽度動揺を認め、根尖相当部歯肉に膨隆を触知した。BCは晩期残存していた。パノラマエックス線写真にて 3歯胚が 1歯根付近に位置していること、1歯根の歯頸側1/3まで及ぶ外部吸収、2歯根の形成遅延を認めた。

診断：3歯胚位置異常、1歯根外部吸収、BC晩期残存

【処置】

3例はいずれも晩期残存乳歯を抜歯後、3の開窓処置を行った。3にリングルボタンを装着し、リングルアーチまたはNanceのホールディングアーチを固定源とし、パワーチェーンで牽引を行った。

【考察】

犬歯の萌出障害は、歯胚が口蓋側に位置するものが3割、唇側に位置するものが7割とされる。今回の3例のうち双生児である2例（症例1, 2）は、その歯胚位置がそれぞれ頬側および口蓋側であった。2例とも、前医にて開窓処置は行われたが、その後の萌出誘導が行われておらず、歯胚位置異常のまま萌出が進行し、隣在歯の歯根吸収を生じた。

これら2例のように、歯胚位置異常に対し、開窓処置のみでは萌出が認められないことは十分に想定される。開窓処置を行う場合は、積極的に牽引を行うか萌出スペースを確保した上で経過観察を行うかの判断となる。埋伏歯の萌出力、萌出方向の評価が必要である。

症例3では、歯胚位置異常の発見が遅れたため、隣在歯の大幅な歯根吸収を許した結果となった。Bの晩期残存は、同部の交換期障害を疑うべき所見であったと思われる。

成長発育期における定期健診では、小児が歯の形成過程にあることを考慮する必要がある。将来的な異常防止や咬合関係を念頭に置いて、混合歯列期の早い段階で少なくとも一度はパノラマエックス線による画像診断を行うことの有用性が改めて示唆された。